

**頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム
—アジア・アフリカ持続型生存基盤研究のためのグローバルプラットフォーム構築—
報告書**

**アジア・アフリカにおける持続型基盤の発展に寄与する
ものづくり研究の可能性**

派遣者：金子 守恵

派遣期間：2013年7月9日～8月1日

派遣先：フロベニウス研究所（ドイツ連邦民主共和国）

キーワード：博物館、コレクションの管理、1950年代南オモ資料、博物館、アウトリーチ

1. 研究課題について（400字程度）

アジア、アフリカに暮らす人びとは、地域の自然環境、コミュニティ内の社会関係、さらには外部との交流にあわせて、日々の生活に必要なもの（＝日用品）をつくりだしてきた。この研究では、ローカルな技術的実践とグローバルな環境変化や社会的な制度が交差する場としてのものをつくる身体（技法）に注目し、コミュニティにおける知（＝在来知）の共有と配分の過程を描き出すことによって、アジア・アフリカにおける持続型生存基盤の発展に寄与することをめざす。具体的には、①調査研究、②共同研究／協働、③研究発信の3点に留意して研究課題を遂行する。今年度は、①エンセーテの生産や消費、交換に関わる知や技法についての調査研究、②エチオピアにおける博物館での特別展示に関する共同研究、そして③国際ワークショップや派遣先機関でのセミナーや講演会での発表を中心に研究発信をおこなう。

2. 派遣の内容（400字程度）

2013年7月9日～8月1日にかけて、ドイツ、フロベニウス研究所に渡航した。今回の渡航は、今年度計画している研究活動のなかでも、②エチオピアにおける博物館での特別展示に関する共同研究に関する知見を深めることと、③派遣先機関でのセミナーでの研究発信をおこなうことである。

3. 派遣中の印象に残った経験や体験（800字程度）

ドイツ国内における民族学博物館の数の多さが印象的であった。今回の派遣では、フランクフルトの世界文化博物館のほか、ライプチヒ、ケルン、ベルリンなどの民族学博物館をたずねることができた。なかでも、2010年にリニューアルオープンしたケルンの民族学博物館は、映像機材をふんだんにつかったテーマ別展示をおこなっていた。子どもから成人、初学者からある程度民族学的な知識がある人まで、幅広い対象を念頭においた熟考された展示内容で非常に感銘をうけた。世界のさまざまな民族を、ひとつのストーリーにそって紹介していくという手法には非常に学ぶところが多かった。また、訪問者のほとんどがケルンに在住もしくはドイツ国内に在住するドイツ人であるため、西欧的な見方を相対化するための展示スペース（先入観や偏見をといなおす展示）が、展示のはじめのほうに設置されている。各展示スペースには、focus pointという映像機材が設置されており、その展示を絶えずドイツの文化的な実践と比較して、展示からなにを学ぶかを示すスポットがつくられていたのが印象的であった。さらに、これまで多くの展示で説明されることのなかった、展示品の集め方の傾向や展示の仕方についての説明もあり、入館者が展示の背景をよく理解できる構成になっていた。これに加えて、各展示品の説明の分

量も、最初の文章でその展示のポイントが説明されているので、その展示物がなにかをしるだけの場合は、最初の一文を読んで次の展示へすすむことができ、さらに情報を得たい人は、それ以下の文章をよむことで要求がみたされるようになっていたのも、印象的であった。

現在ドイツには、ケルンのようなテーマ別展示のほかに、従来から続けられてきた地域別展示をおこなっている博物館もある。また、あたらしい試みとして、芸術家とコラボレーションして、民族学的に収集されてきた物を、現代芸術の視点からとらえなおして展示するところみもあることを実感できたことも非常に有意義であった。

4. 目的の達成度や反省点 (400字程度)

フロベニウス研究所に所蔵されているエチオピアに関わるすべての資料（ウェブサイトで公開されていないものも含め）のインデックスを入手し、今後必要になった場合に、どのような手続きで入手できるかを確認できた。この成果は、別途日本のエチオピア関連の雑誌に研究レポート等でまとめて発表する予定で準備をすすめられた。また、エチオピアの博物館で特別展示をおこなうための、さまざまな要点について、受け入れ研究者となってくれたソフィア博士とともにディスカッションをおこなうことができた。また、ウィークリーセミナーにおいて、フロベニウス研究所およびゲーテ大学の文化人類学の研究者や院生に対して発表をする機会を得たことも非常に貴重であった。文化人類学的なデータ集種の手法について、さまざまな見解や質問をうけることができたという点で一定の成果があったと考えられる。反省点としては、ドイツ語の資料が圧倒的に多いため、せめて目次に記載されている程度のドイツ語を習得しておくべきであったという点である。

5. 今後の派遣における課題と目標 (400字程度)

今回の渡航で得られた博物館展示に関するさまざまなアイデアと、ソフィア博士と議論した観光客と地元の人びとに対する展示の仕方について、より具体的にその方法をつめていく点が今後の課題であり、目標である。8月末には特別展示をひかえているので、そちらの展示とそれに関わる諸活動について、対象を明確に定めた準備をすることが具体的な目標になると考えている。



写真1 セミナーでの発表の様子



写真2 ケルンの民族学博物館の展示。先入観や偏見を相対化する展示。（「アフリカは田舎ばかりか？」という先入観に対する問いを展示している）



写真3 2014年1月に展示をおこなうメキシコの芸術家によるレクチャー（フランクフルトの世界文化博物館）。テーマは、貨幣について。この博物館では、芸術家が展示の準備をおこなう作業スペースや宿泊施設も提供し、展示準備のプロセスから支援している。